

5. 鍬

鍬と鋤は弥生時代の稲作開始 이래の農具である。摂津市域では長い伝統をつぐ風呂鍬と近代の金鍬が用途で使い分けられてきた。鍬は昔は土木工事の道具でもあった。

風呂鍬は古墳時代から

<A>ととは、木の鍬に鉄の刃先をはめ込んだもので、農業史では風呂鍬と呼んでいる。摂津市では木の鍬平をホ口、風呂鍬をホゾグワとも聞いた。

弥生時代の鍬は全体が木で出来ていた。古墳時代になってU字形をした鉄の刃先を鍬の鋤の先にはめることが始まり、鍬の性能が向上した。いまでも納屋で見かける風呂鍬は、古墳時代以来の形式を少し形を変えながら今日まで伝えたものである。

大鍬と鍬

摂津市域の風呂鍬は<A>のように柄の長さが95cmぐらいで刃先が大きくがっしりしたタイプと、のように柄の長さは130cmぐらいで鍬平も細手のタイプと2つに分かれる。柄の角度は<A>の方が大きい。そして<A>タイプはオオグワ（大鍬）・クロクワ（黒鍬）と呼ばれオワリ（尾張）とも聞いた。はクワ（鍬）と呼ばれていた。

大鍬は耕起・土木用

<A>の大鍬は犁のすき残しの土を耕したりアゼヌリにも使った。田の水漏れがしないように泥を練って畦の内側を綺麗に塗っていくのだが、柄の角度が塗るのにちょうどいいのだという。またクロクワは農作業よりは土木作業に使うとも聞いた。ため池の修理は粘土を置いて3～5人が向かい合ってクロクワで交互に叩いて締めていく。

細手の鍬は畑作用

の鍬はうねを削るのに使う。谷の土を鋤いて畝の肩にのせると聞いたが、これは麦作りの話である。Bタイプの鍬はもっぱら畑作用と言い切ってもいいようである。

のうち柄の角度がさらに浅くて刃先の両端が三日月のように飛び出したものアイワグと呼んで苗代づくりにも使う。この型は伊丹から尼崎では角度がさらに小さい。

唐鍬・備中鍬・チョンノグワ

<C>はトングワ、トウグワ（唐鍬）土を崩すのにいい。<D>はチョンノグワ（手斧鍬）で草を削る。<E>は備中鍬で、牛も入らぬ湿田の稲株を返したという。

金鍬とジョウレングワ

<F>の金鍬は大鍬に代わりとして広く使われた。<G>のジョウレングワ（鋤廉鍬）はの鍬に代わるもので三徳鍬とも聞いた。<F>と<G>は近代の鍬の代表だ。

